

おわりに

◎大人の文化性・感受性を高める

本書の最後の章では、楽しさを共有するために重要な点をいくつか考えました。それにもう一つだけ付け加えることがあります。それは、関わる側の大人が自らの文化性と感受性を高めることです。

激しい問題行動を示した、ご自身の息子さんである次郎さんの育ちを書かれた本¹⁾があります。次郎さんは、特に思春期頃、毎日、食事をした後に使った皿を床に投げつけて割る、スクールバスから降りるとジャージと靴を破り捨てる、といった破壊行動を繰り返します。そして最も大変なときは、家のドア、床まではがし、壊してしまいます。その後もさまざまな紆余曲折があり、卒業後はびわこ学園に入園されます。

そこで、田中敬三さんという指導員がやっておられた粘土に出会います。²⁾最初は粘土室に入ることそのものを激しく拒否していた次郎さんですが、紙と鉛筆を用意され、粘土はやらなくて絵だけ描いてもいいことがわかってから少しずつ落ち着きをみせます。そして、ある時期から、粘土の塊をとにかく両手で激しく叩き、またそれをひっくり返してさらに

叩く。粘土が広がると両側から折りたたんでまた激しく叩く。ただただ、それを延々と繰り返した時期があったそうです。力がものすごく強いため、粘土と粘土の間が密着状態になり、粘土板の表面に彼の指の指紋までくつきり浮き上がるようになります。それを田中さんはすてきな作品としてとらえ、本の中でこう説明されています。「お釈迦さまの足形を石に刻んだ『仏足石』のような次郎さんの手形」(田中、2008年、159頁)。

次郎さんがそのように意図して制作したのではないでしょう。だからこそ、そこに価値を見出すことができるかどうかは、それを見る大人の側の深い文化性に依っていると考えられるのです。私にはただ単なる手跡のついた粘土板にしか見えないものに、田中さんは深い価値を見出し、作品として展示します。それは田中さんの粘土や芸術に関する深い文化性に裏打ちされた、確かな視点が存在するからこそ可能になったものなのです。³⁾

各教科や学問分野の深い理解は、その文化をとらえる力を多様に、かつ深くします。特に障害のある人と関わる上では、「できるーできない(わかるーわからない)」とは異なる視点で、その人の姿、活動、言動をとらえる大人の「目」が重要になります。その際、関わる大人の文化性とそれをとらえる感受性が鋭く問われるのです。私たち自身が自分の文化性を高める日々のとりくみが、自閉スペクトラム症児者の楽しい世界を発見し共有する上で、大きな意味をもつのです。

この点では芸術領域以外でも、近年さまざまな意欲的实践が発表されています。⁴⁾既存の

文化を深く学びながら、既存の枠を超えた視点をつくり出す。スキルの習得だけでなく、創造的な営みが、私たち自身に強く求められているのです。

●ネガティブ・ケイパビリティ

最後に、心の理解ということの一つだけふれておきます。とても優れた（と私が感じる）実践をする方にお話を聞くと、共通して言われることがあります。それは、「子どもの気持ち」がわかった！ とはいつまでたっても思えない」というものです。ある先生は実践を深めるなかで、この子はこういう気持ちでやっていたんだ！ とわかった気分になるときは確かにあると言われます。しかし、わかった！ と思った瞬間に、今まで見えていなかったその子の「（自分には）まだわかっていない心」の存在が見えてしまうと表現されました。その子ども理解の深さに、思わずはっとさせられました。

近年、「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉が、カウンセリングの領域などでいわれています⁵⁾。医療でいえば、今の主流は、なにかが治ったりできたりするようにする（ポジティブなケイパビリティ（capability）を増やす、追求する）ことを目的にしています。それに対し「ネガティブ・ケイパビリティ」は、治らないとかできないままであるといったネガティブなことを、そのまま受け止めることを指します。それは「答えのない事態に耐える力」といわれたりします。人の心を理解することは、まさに「答えのない事態

に耐える力」を必要とするものです。それはさきほどふれたように、人の心は、わかった瞬間にわからない未知の部分が見える、その繰り返しをその本質とするものだからです。しかし、だからこそ人の心を知ることが、どこまでいっても汲みつくせないおもしろさをもったものともいえるのかもしれない。

この本で考えてきたように、自閉スペクトラム症児者との関わりは、この汲みつくせないおもしろさをいっぱい教えてくれます。そして、相手の心を理解することは、それを鏡として自分の心を知ることでもあります。自分と相手の心をわかり合う旅を少しでも楽しむ手がかりを、全国各地の豊かな実践、そして家族の声、当事者の発信からたくさん学び、紡ぎだしていければと思っています。

おわりに

- (1) 新見俊昌・藤本文明・別府哲『青年・成人期自閉症の発達保障―ライフステージを見通した支援』クリエイツかもがわ、2010年。
- (2) 田中敬三『粘土でにやにゆによ』岩波ジュニア新書、2008年。
- (3) (2)の本の中には、粘土を「このように使つ」という通常の型をまったく外し、その人が粘土を「楽しめる」やり方であればなんでも柔軟に受け入れる様子がいていねいに描かれています。
- (4) 算数でいえば、麦の会・品川文雄・越野和之（編著）『子どもからはじめる算数―すべての子どもに学ぶ喜びを』全障研出版部、2017年。
- (5) 常木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ―答えのない事態に耐える力』朝日新聞出版、2017年。